

JSPHCS/BMKK 海外研修参加報告書

国立がんセンター東病院 薬剤部 松井 礼子

1 . 44rd American Society of Clinical Oncology (ASCO) Annual Meeting, May 30-June 3, 2008 McCormick Place Chicago, Illinois

ASCO は昨年と同じ、イリノイ州シカゴのミシガン湖のほとりにある McCormick Place で開催された。海のような地平線の見えるミシガン湖の大きさに驚き、幕張メッセ 3 個分の広さの McCormick Place にも更に驚かされた。会場内の移動も容易ではなく、連日に渡る移動距離の長さに体の疲労と足腰の痛みに苦戦をする結果となった。約 3 万人が世界各地から ASCO に参加するためにシ



カゴを訪れ、新しい知見を持ち帰り、がん治療が進歩して行く。がん医療の発展を支える学会の威力と規模の大きさを痛感させられた経験だった。学会に発表される演題の中から最も重要な又は治療方針に影響のあると考えられる Abstracts は学会初日に配布される。また、前日の演題発表の中で重要は演題は「ASCO Daily News」として翌日に配布される。参加者をはじめ、ASCO の HP を通じ全世界に今回の学会での焦点となる新しい所見が明確にかつ迅速に伝わるようになっていた。

優秀と認められた演題が発表される Plenary Session では、Cetuximab を題材とされる演題が Colorectal Cancer と Lung Cancer と 2 つ挙げられ、注目度の高さが伺われた。転移性の大腸癌患者に対して、FOLFIRI 療法と FOLFIRI 療法に Cetuximab を加えた療法との比較試験 (CRYSTAL Trial) の報告では、KRASwild-type 患者では Cetuximab 群が有意に (HR0.68 P=0.017) 効果が示されたのに対し、KRASmutation 患者は Cetuximab を加えることの有用性がない事が示された。(HR1.07 P=0.47) また、Lung Cancer では NSCLC での標準治療であるシスプラチン+ビノレルビン療法に Cetuximab を加えるか否かにおいて、EGFR-detectable 患者を対象とした Phase III Trial が発表された。Cetuximab 併用においてはアジア人での有用性が示される報告が多い中、今回の報告では白人患者においても有意に MedianOS を延長させ、1 年生存率を上昇させた事が示された。(HR0.803 P=0.003)

2. Clinical Exchange Program Japanese Society of Pharmaceutical Health Care at The University of Texas M.D.Anderson Cancer Center, Jun 4- 6 , 2008]

テキサス州ヒューストンにある M.D.Anderson Cancer Center では充実したカリキュラムに基づいて、リサーチナース、ソーシャルワーカー、臨床医、病理診断医、薬剤師、がん専門薬剤師と様々な分野のスタッフの講義を中心に、実際の診療の立会いや各分野を見学をさせて頂いた。職種の多さとスタッフ数の多さに驚いた。現在の日本において、1職種が行っている分野が更に細分化され、各々に専門のスタッフがサポートしているので負担が軽減されている事が印象深かった。



患者に対する医療の提供の他に患者サービスが充実しており、ヨガ教室や料理教室の開催や患者のリラクゼーションサービスなども行われていた。また、患者の罹患しているがん情報を患者のニーズに合わせ習得するサービスが整っており、最新の論文までもがファイリングされ閲覧できると共に、それをアシストする職種も存在している事に強い関心を持った。がん専門薬剤師の Van A.Trinh,PhD さんの講義ではがん専門薬剤師の主な仕事として、実際のがん化学療法を行う患者に対してのサポート体制の話があった。主なものとして、患者さんの薬物療法歴の調査、血液・生化学検査データのチェック、患者さんの治療モニタリング、コンプライアンスの維持、各コースのモニタリングと副作用の確認、治療中止の判断、治療中止前に続ける選択肢の患者カウンセリング等の提供であった。この薬剤管理指導の点で見ると、現在自分達の業務とはかけ離れていない印象を受けた。しかし、現段階では日本にはテクニシャンがいないため、米国のテクニシャンが行っている調剤業務や抗がん剤の混注業務等の部分も薬剤師が行っているのが現状である。また米国と比較して薬剤師の人数が桁違いに少ないために薬剤師一人が担う負担は大きく、全ての患者を完璧にモニタリングする事はなかなか難しい部分もある。薬剤師は臨床の場で活躍しチーム医療の中で必要不可欠な存在に成る事を目指すためにも、人員の確保と我々の努力が必要であると強く思った。

3. おわりに

今回の研修は私にとって本当に有意義なものであった。夢と思っていた ASCO を実際に体験する事ができ、想像を絶する規模の大きさと学会の機能そして、がん医療に対する勢いを体を感じる事が出来た。今回は圧倒されることが多く、発表を理解する事だけに集中して余裕はなかったが、ASCO をとても身近に感じるようになった。今後は会場へは行かなくとも、ASCO での最新情報得て、薬剤師としての立場で内容を理解し、分析して臨床の場に生かせる知識にして行きたいと思う。M.D.Anderson では患者さんを中心とし多くの職

種が関わり、がん治療だけでなく、精神的・身体的サポート体制が構築されていた。今後は日本においてもこのような体制を早急に取り入れて行くことが必要だと思った。

最後に、本研修の機会を与えて戴きました日本医療薬学会会頭 北田光一先生をはじめ関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。また、同行いただいた平井みどり先生、研修をご一緒させて頂きました北田徳昭先生、柴山良彦先生、矢野良一先生、そして、海外研修に喜んで送り出してくれた国立がんセンター東病院薬剤部の皆様に感謝致します。